

# 2018 年ブラジル大統領選挙と 社会的公正を求める市民の行動<sup>1</sup>

田村 梨花

## はじめに

2018 年 10 月に行われたブラジル大統領選挙は多くのメディアで「極右候補のボルソナロ（Jair Bolsonaro）が圧倒的支持を得て当選」と報道された。PSL（社会自由党）のボルソナロは前政権の PT（労働者党）とは異なり市場経済を重視する公約を掲げる候補者であり、産業界からの支持を得たことは理解できるが、人種差別発言、女性蔑視、軍事政権擁護、先住民や性的マイノリティへの弾圧を公言する人物をブラジル国民が選んだことに、右傾化するブラジルという印象を受けた人は少なくないのではないだろうか。本稿では、ボルソナロを支持しなかった人々の行動に注目し、彼の発言に抗議する社会運動と、軍事政権から民政移管のプロセスにおいて重要な役割を果たし社会的公正の実現と政治への市民参加を促進してきた市民社会組織による声明を中心に、ボルソナロ政権に対抗する市民の動きについて紹介したい。

## ボルソナロは誰に支持されたのか

10 月 28 日の決選投票の結果はボルソナロ 55.16%、PT のアダッジ 44.84%であり、大差とは言えないまでも過半数を超える支持を得たとされる。ただし、今回の選挙は有権者のうち 21.43%が無投票であり、それを考慮すると、白票 1.69%、無効票 5.83%、ボルソナロ 39.2%、アダッジは 31.9%となる<sup>2</sup>。無投票、白票、無効票の合計は約 3 割、投票所に足を運びボルソナロに一票を投じた人々は全体の 4 割弱なのである。

世論調査をもとにこの選挙を分析した菊池は、ボルソナロ支持者の特徴として所得と教育の水準が高いこと、北東部以外の地域で顕著であることとともに、多くの有権者が彼を「民主主義の擁護者」として位置づけていることを指摘し、その理由として、これまで PSDB（ブラジル社会民主党）に投票してきた「反 PT」派の有権者の多数が「中道・中道右派的な選択肢の一つ」としてボルソナロを支持した

側面があることを分析し、こうした政権選択は民主主義の後退に繋がりがかねないものであるとする<sup>3</sup>。また、有権者の多くが、約 13 年の PT 政権が築いた社会の現状に生活の不満と治安の不安を抱くなかで、汚職への怒りが最高潮に達し、PT 以外の候補者を消去法で選ばざるを得なかったという見解が各紙で報道されている。

## 反ボルソナロの論理

### 一暴力と不寛容に立ち向かう行動

では、ボルソナロを批判し彼の問題発言に抗議する人々はどのように動いていたのだろうか。1964 年から 21 年間続いた軍事政権から民衆の手に政治を取り戻した 1985 年の民政移管以降、30 年以上の年月をかけてブラジルは民主主義国家を構築してきた。その時もっとも重要視されたのは、すべての人の自由の尊重と政治参加の権利を揺るぎないものとする基本的人権の保障であった。1988 年の民主憲法作成の過程で重要な役割を担った社会運動体である市民社会組織は、これまでさまざまな局面で政府政策に対し審議や異議申し立てを行なうことで社会的公正を実現し、民主主義の深化を促してきた立場にある。ボルソナロは社会活動家に対し挑発的な姿勢を表し、「ブラジルにおける政治的組織活動（アクティビズム）の全てに終止符を打つ」と公言していた。それに対し、約 4,000 の市民社会組織が連帯して拒否文書を公表した。社会的不平等や差別の問題に対し、時間をかけて取り組んできた行動を弾圧する態度は、ブラジルの民主主義に対する脅威であるとして、ABONG（ブラジル NGO 協会）は「民主主義のない勝利はない」という声明を出した<sup>4</sup>。

人権を冒涇するような公言にもかかわらずボルソナロが支持率を上げていることに対し危機感を持った一般市民による抗議運動も活発化した。女性を蔑視する数多くの発言に対し、Facebook に作られたグループ「ボルソナロに反対する女性連合（Mulheres unidas contra o Bolsonaro）」による



リオデジャネイロ市セントロ地区 Cinelândia 広場で開かれた「#EleNão!」デモ（撮影：下郷さとみ／フリージャーナリスト）



「#EleNao（彼はありえない）」運動が、SNS で拡散され、約 380 万人の支持を得て拡大した。第一回投票の一週間前の 9 月 29 日に全 26 州と連邦区の 114 都市でデモ運動が起き、サンパウロでの参加者は約 50 万人となった<sup>5</sup>。

政治運動として定着したデモ運動とは異なる市民自身の行動も見られた。決選投票を目前に控えた時期に、浮動票への働きかけとフェイクニュースに関する情報の共有を目的として、「ストリート選挙カフェ」というムーブメントが始まった。



ストリート選挙カフェの一般参加者。「もし無効票か白票にしようと思っているなら、私たちとコーヒープレイクしよう!」というメッセージボードが置かれている（提供：Revista Fórum）

路上に机と椅子を並べてカフェスペースを設置し、「まだ誰に投票すべきか迷ってる？一緒に話をしよう!」というポスターを掲げ、手作りのケーキとコーヒートを振る舞いながら、会話の機会を作ろうという試みである<sup>6</sup>。リオ市南部の街角で市民が始めた活動に共感したアーティストが次々に参加したことで話

題となり、「ボルソナーロの不寛容な発言に象徴される嫌悪や暴力の言説に打ち勝つための試み」としてメディアでも広く紹介された<sup>7</sup>。

選挙への意思表示の市民の行動として、「武器ではなく本を」というムーブメントも話題になった。第 1 回選挙の際に、ボルソナーロ支持者が投票所に持ち込んだ銃で電子投票箱のボタンを押す動画が SNS 上で公開された。民主主義の象徴的空間に暴力のシンボルである銃器が持ち込まれたことに対する抗議運動として、決選投票の日に自分の愛読書を持参する運動が起こった。アーティストや政治家をはじめ、その行動に共感した市民が次々に自分の本を SNS で紹介した。書籍の顔ぶれは、黒人や LGBT 当事者による社会運動、軍事政権の人権侵害の記録、世界における政治的暴力を扱ったもの、『被抑圧者の教育学』で知られるパウロ・フレイレの著作など、ブラジルの歴史からの学びを今こそ思い出そう、という意識により選ばれたものである<sup>8</sup>。こうした行動は、ブラジルにおける社会的公正のために自分ができるところを実践し、自由と平等の尊重のために行動するという、民主主義擁護の意識と姿勢が市民のなかに根付いていることの表れではないだろうか。

### 新政権による改革と市民の反応

ボルソナーロ新政権は発足後、市民社会が懸念する制度改革に着手している。社会運動への圧力としては、2019 年 1 月 1 日に公布された暫定措置令（Medida Provisória: MP）870 号において、大統領府事務局が国際組織と NGO の活動を監視する役割をもつという文言が盛り込まれた。ABONG は、この法令は 88 年憲法に違反しているとして抗議声明を出した。2 月 12 日には両院議員と約 50 の市民社会組織による民主主義と人権を擁護するネットワークも作

られた<sup>9</sup>。そのような動きに対し、政府は2月21日に「公的資金の使用の監視を意味し、活動への介入の意図はない」と説明している。

教育分野では、教育現場における思想統制や性教育の排除を主張する「政党なき学校 (Escola sem Partido)」による教育指針修正の動きが危惧されたが、多数の議員の反対を受け昨年のうちに取り下げとなった。教育相として選ばれた右翼思想家で元陸軍士官学校教員のロドリゲス (Ricardo Vêlez Rodríguez) は、国歌斉唱とボルソナーロのスピーチを音読させ撮影するように公立校に命じたが、猛烈な批判に遭い、謝罪と訂正を余儀なくされるという騒動が起きている。

一方、銃規制については1月15日の大統領令9685号により銃器所持が緩和された。犯罪の抑止を大義名分とする銃規制緩和の推進が、銃による事件の増加に結びつくことが懸念されている。銃による護身を促進する思想の浸透は、軍警察による暴力の増加にも影響を与えるだろう。昨年3月14日、貧困層出身のアフリカ系女性で同性愛者というマイノリティの当事者であり、警察による暴力問題を非難していたPSOL (社会主義自由党) 所属リオデジャネイロ市議会議員のマリエリ・フランコ (Marielle Franco) と同乗の運転手は何者かに銃撃され死亡する事件が起きた。フランコ殺害事件の正当な捜査と迅速な解決を要請する運動は国際人権団体アムネスティでも継続されていた<sup>10</sup>。3月に行われたカーニバルでは、権威主義的でマイノリティを排除するボルソナーロの思想を批判するグループの躍進がみられた。リオデジャネイロでは、ブラジルの歴史において重要な役割を果たした先住民、黒人、女性リーダーをテーマとしたマンゲイラが故フランコ議員に敬意を表する山車で喝采を浴びた。その一週間後、実行犯の容疑者として退役軍警察と元軍警察が逮捕されたが、殺害を命じた主犯格の捜査が引き続き求められている<sup>11</sup>。

市民社会の懸念である新政権の強硬策は今のところ議会や世論の動きによって修正されているが、銃規制緩和の影響や、MP870にみられるLGBT権利保護局の廃止や先住民土地に関する権限の農務省委任といった人権侵害につながる改悪など、今後の展開については予断を許さない状況といえる。

## むすびにかえて ―社会的公正が守られるブラジルのために

ブラジルの市民社会組織にとって、民主主義を守めることは88年憲法が遵守される社会の構築を意味する。誰ひとりとしてその権利が侵害されない、社会的公正と思想の自由が約束される社会を目標としている。ABONG理事のクルスは「ブラジルには民主主義の闘争における勝利の経験がある」<sup>12</sup>とし、どのような政局においても社会正義と基本的人権のための活動を成し遂げる役割を持つ組織としてブラジルのNGOを位置づける。リオデジャネイロのNGO、IBASE (ブラジル社会経済研究所) の代表グリズボウスキーは、今回の大統領選でみられた人々のなかに存在する多様性への嫌悪や不寛容、人種主義や男性優位主義を省察し、市民権の実践は私たちの身近な場所からのみ可能であり、それらを結びつけながら運動の大きな波を創り出すことが重要であるとする<sup>13</sup>。

2018年の選挙は政権交代のインパクトが注目され、経済界も市民社会もボルソナーロと議会体制の動向に目を向けがちであるが、地方選全体に目を向けると民主主義的制度の定着の姿も確認することができる。殺害されたフランコ市議の所属政党PSOLから、彼女と共に活動してきた女性3人が州議会議員に、1人は下院議員に選出された<sup>14</sup>。「暴力には屈しない」という思いと政治を変える意志を引き継いだ人物の当選は、社会的排除層の当事者として社会正義に立ち向かう信念を支持する有権者の存在を裏付けている。

特筆すべきは、思想の分断を「対話」によって乗り越えようとする姿勢である。「ストリート選挙カフェ」のムーブメントは、SNSではなく人々と直接会って話をするを大切にしたい行動である。直接民主主義、政治に声を上げる文化、抗議と抵抗から人々の連帯の波を創り出す方法により民主主義を守ろうとしているブラジル市民の姿に注目していきたい。

(たむら りか 上智大学外国語学部ポルトガル語学科教授)

1 本稿は上智大学イベロアメリカ研究所主催シンポジウム「ブラジルはどこへ向かうのかー2018年大統領選挙を終えてー」(2018年11月22日)における執筆講演を基に作成されたものである。

2 *Gazeta do Povo*, “Eleições2018 - 2º turno,” 29 de



outubro de 2018 ([www.gazetadopovo.com.br/apuracao/resultado-eleicoes-2018-2turno/presidente/](http://www.gazetadopovo.com.br/apuracao/resultado-eleicoes-2018-2turno/presidente/))  
2018年11月22日アクセス。

- 3 菊地啓一「ブラジルの民主主義は後退するのか?——大統領選世論調査を手がかりに」『IDEスクエア』アジア経済研究所、2018年、pp.8~9。
- 4 2018年10月11日ABONGニュースレター。
- 5 *GI*, 29 de setembro de 2018.
- 6 “Artistas vão às ruas conversar com o povo e virar votos para Haddad,” *Revista Fórum*, 26 de outubro de 2018.
- 7 *Carta Capital*, 27 de outubro de 2018.
- 8 *Brasil de Fato*, 30 de outubro de 2018.
- 9 「民主主義と人権を守る議会戦線 (Frente Parlamentar Mista em Defesa da Democracia e dos Direitos Humanos)」(下院ウェブサイトより)。

- 10 “Demand justice for the killing of Marielle Franco,” *Amnesty International*, (<https://www.amnesty.org/en/get-involved/take-action/w4r-2018-brazil-marielle-franco/>) 2019年3月12日アクセス。
- 11 *GI*, 12 de março de 2019.
- 12 Cruz, Mauri, “É preciso se preparar para depois das eleições,” *Informes ABONG*, 10 de setembro de 2018.
- 13 Grzybowski, Cândido, “Tempos desafiadores para a democracia,” *IBASE website*, 29 de outubro de 2018 (<https://ibase.br/pt/opiniao/tempos-desafiadores-para-democracia/>) 2019年3月12日アクセス。
- 14 “As'outras'Marielles que o Rio elegeu,” *El País*, 13 de outubro de 2018.

## ラテンアメリカ参考図書案内



### 『現代ブラジル論 — 危機の実相と対応力』

堀坂 浩太郎・子安 昭子・竹下 幸治郎 上智大学出版 (上智大学新書 010) 発行、ぎょうせい発売  
2019年4月 349頁 2,000円+税 ISBN978-4-324-10573-3)

2018年10月18日のブラジル大統領選挙決選投票では、元軍人で超保守的な言動を公言してきたボルソナロ下院議員が選出された。経済・政治が変調を来し、政官を巻き込んだ大規模汚職の発覚で政治不信が、国民の多くにこの事態を選択させたのであるが、それはまた「ブラジルはどこに向かっているのだろうか」という懸念をもたらしものになった。本書はブラジル政治学、国際関係論、ラテンアメリカ経済を専門とする著者たちが、まず「第Ⅰ部 今を読み解く」ことから始め、「第Ⅱ部 民主化後の制度設計」では1988年憲法体制以降の国民の政治参加、政治制度とガバナンス、治安などの政治面、新自由主義下での制度設計と競争力強化に向けた産業・企業の挑戦などの経済・ビジネス面とブラジル外交を巡る環境の変化、21世紀のグローバル外交を考察し、「第Ⅲ部 歴史・地誌・人と社会」ではブラジルの“発見”から軍事政権時代までの歴史、広大な国土と豊かな自然、多彩な産業形成などの地誌、多民族から構成される社会、男性主役社会の変化と依然歪みが温存される社会と人を解説して、ここまでで読者はブラジルの基本的知識と背景を理解することができる。そして「第Ⅳ部 独立200周年に向けて」では、「ブラジルはどこに向かっているのだろうか」という共通問題意識で、ボルソナロ大統領の下で、国民の自信を取り戻せるか？ 中所得国からのステップアップの課題は？ これまで左右のイデオロギーに振れた反省から求められた外交が現実主義的な中庸の道を歩めるか？ をそれぞれの専門分野から論じている。

コンパクトで平易に書かれているが、現代ブラジルを知るための基礎的な状況、課題、今後の見方が分かり易く説明されている有用なブラジル解説書である。  
(桜井 敏浩)